

若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究 —表面的関係志向性と対人有能性との関連を中心として—

諸井克英・平井加苗*

I. 問題

青年が直面する発達課題として、①同年齢の男女との洗練された交際の学習と②自己の性別に応じた社会的役割の学習をあげることができる（Havighurst, 1953）。しかしながら、長田（1994）によれば、徒党時代の様相が変化し対人技能の習得が不十分となっているために、現代青年は、仲間との間に適度な距離をおくことによって表面的には円滑な対人関係を維持することになる。松井（1990）も、同様な指摘を行っている。全国調査をみても（総理府広報室編, 1993；全国20歳以上の者）、年齢層の異なる子ども同士での活動の不足が認識されており（39.6%の者がこの点での体験が子どもに不足していると回答）、子どもの対人関係の様相が変化しているのである。また、高校生を対象とした調査でも（日本青少年研究所, 1997）、友人関係志向性の点で興味深い日米差が得られている。日本の青年は「互いに干渉しないつきあい」を好むのに（日本51.7%, 米国37.9%）、米国の青年は「少数の友人との深いつきあい」を志向する（日本62.4%, 米国86.1%）。

つまり、我が国の若者が表面的関係志向性を抱く傾向にあると仮説化できる。若者は、自らの対人的環境の中に没入することをできるだけ回避するのである。大学入学を利用して友だち関係の成立過程を調べた山中（1996）の研究では、入学直後の出会いの初期に当該人物と親密になるかならないかが決定されてしまう傾向が認められた。表面的類似性情報による友人選択が後々の時点まで継続されているのである。

落合・佐藤（1996）は、中学生・高校生・大学生を対象として、友だちとの

*：人文学部・社会学科〈社会心理学コース〉平成10年度卒業，社会人編入学生。

つきあい方に関する調査を行った。その結果、「人とかかわり方に関する姿勢（積極的関与－防衛的関与）」と「自分がかかわろうとする相手の範囲（選択的一全方向的）」という基本的2次元を同定した。また、つきあい方のパターンが「浅く広くかかわるつきあい方」（中学生）から「深く狭くかかわるつきあい方」（大学生）へという変化傾向が認められた。

若者が対人関係とりわけ友人関係をどのように管理しているかに関する問題については、岡田（1991, 1993 a）が述べているように、臨床家や評論家がさまざまな指摘を行っている。しかし、これらの指摘は、臨床的問題を抱える特定の個人から若者全体の特徴を直観的に把握する試みであり、1つの研究仮説としての意義を認めることはできる。これらの指摘の妥当性は実証的研究に委ねるべきである。Table 1 には、友人とのつきあい方の基本的構造を検討した先行研究で得られた結果の要約が示してある。研究ごとに測定項目の内容や項目数も異なり、さらに用いられている統計的手法も同一ではないので、一概に比較できない。しかし、抽出された成分を総覧すると、落合・佐藤（1996）が認めたように、関わりの深さ（浅さ）と関わりの広さ（狭さ）に大別できるように思われる。

本研究の第1の目的は、若者の対人的環境の中核となるはずの友だちとの関係性をどのように管理しようとしているかを検討することである。つまり、先行諸研究（Table 1 参照）に基づいて、友だちとのつきあい方の基本的構造を探索する。

ところで、長田（1994）は、若者の表面的関係志向性の基底に対人技能の低下を仮定している。ここでは、これを「対人関係技能低下」仮説と呼ぶ。交友関係の形成を調べた山中（1996）の研究では、対人技能が低い者の場合に初期分化傾向が顕在化した。これは、長田の仮説を支持している。しかし、落合・佐藤（1996）の研究では対人技能との関連は検討されておらず、他の研究でも、表面的関係志向性と対人技能低下との関連を調べた研究はみあたらない。青少年を対象とした国際比較調査（総務庁青少年対策本部編, 1999）をみると、Table 2 に示すように、明確な日米差を認めることができる。日本の若者は、明らかに対人技能という点で「劣って」いる。

Buhrmester, Furman, Wittenberg, & Reis (1988) は、先行理論や経験的研究に基づき、次の基本的な対人有能性次元を提起し、その妥当性を確認した。①開始、②否定的主張、③開示、④情動的支援、⑤コンフリクト処理。開始有能性は、未知の他者との関係を形成するために必要であるし、開示有能性は、

Table 1

友人関係管理様式に関する先行研究のまとめ

研究	尺度項目・対象	分析方法	1次成分	高次成分
岡田 (1991)	33項目 (7点尺度) 専門学校生・短大生・大学生 男女	主成分分析-直交回転	I. 深い関わりの拒否 II. 躁的防衛	
岡田 (1993b)	19項目 (2点尺度) 大学生 男女	林の数量化Ⅲ類	I. 関わりの深さ II. 関わりの個別性	
岡田 (1995)	22項目 (6点尺度) 大学生 男女	主因子法-直交回転	I. 気遣い II. ふれあい回避 III. 群れ	
岡田 (1998)	50項目 (6点尺度) 大学生 男女	主因子法-直交回転	I. 自己閉鎖 II. 自己防衛 III. 友だちへのやさしさ IV. 群れ	
上野ら (1994)	7項目 (2点尺度) 高校生 男女	林の数量化Ⅲ類	I. 友人への同調性 II. 友人との心理的距離	
落合・佐藤 (1996)	35項目 (5点尺度) 中学生・高校生・大学生 男女	主因子法-プロマックス回転	I. 防衛的 IV. 積極的相互理解 III. 自己自信 II. 全方位的 VI. 被愛願望 V. 同調	I. 人との関わり方に関する姿勢 II. 自分が関わろうとする相手の範囲
小塩 (1998)	27項目 (4点尺度) 専門学校生・大学生 男女	主因子法-プロマックス回転	II. 積極的楽しさ IV. 集団同調 V. 自己開示的関わり I. 気遣い III. 一線を引いたつきあい方	I. 関わりの広さ II. 関わりの深さ

Table 2
対人技能に関する日米差（総務庁青少年対策本部編，1999）

		いつでも できる	なんとか できる	できない	NS
相手が怒っているときに，うまく なだめる。	〈日本〉	26.6	58.8	10.4	4.2
	〈米国〉	67.7	24.5	4.0	3.8
知らない人とでも，すぐに会話を 始める。	〈日本〉	32.1	42.7	23.6	1.6
	〈米国〉	65.4	28.6	4.8	1.2
話し合いの和の中に，気軽に参 加する。	〈日本〉	33.8	46.9	16.4	2.9
	〈米国〉	68.3	26.0	3.5	2.2
何か失敗したときに，すぐに謝 る。	〈日本〉	55.2	33.3	9.6	1.8
	〈米国〉	65.8	28.0	4.1	2.1
自分とは違った考えを持ってい る人とうまくやっていく。	〈日本〉	27.2	49.6	17.9	5.3
	〈米国〉	69.1	24.5	4.4	2.0

日本 N=1047；米国 N=1000

数値は百分率

NS：「わからない」と「無回答」

他者との関係の親密化には不可欠である。また，相互に尊重し合う関係を構築するためには相互の内部情報を交換する技能や相手の内面を支える技能が重要になる。また，対人関係の進展の中では，意見のくいちがいやいさかいが発生する。そのようなときに，否定的主張技能やコンフリクト処理能力が発揮されなければならない。このように，対人関係の進展段階や状況によって，必要とされるべき技能は異なる。先述したように，友だち関係に対する表面的志向化の基底に対人関係を営む能力の低下があるならば，表面的志向性と対人有能性との間には負の関連がみられるはずである。本研究の第2の目的として，このことを検討する。

以上の2つの目的のために，青年期にある男女（大学生，短大生，看護学校生）を対象とする質問紙調査を実施した。

Ⅱ．方法

調査対象および調査の実施

静岡大学、常葉短期大学、静岡県中部看護専門学校での心理学関係および共通教育の授業を利用して、『友だちに対する意識とつきあい方』の名目で質問紙調査を実施した。実施状況を Table 3-a に示す。

記入漏れなどの不適切な回答をした者や、年齢が高い者（25歳以上）を除き、427名（男子166名、女子261名）を分析対象とした。被験者の内訳をTable 3-b に示す。全体の平均年齢は19.10歳（ $SD = 1.05$, 18～24歳）であったが、男子（19.30歳, $SD = 1.24$, 18～24歳）のほうが、女子（18.97歳, $SD = .89$, 18～24歳）に比べて少し年齢が高かった（*Mann-Whitney*の U 検定, $z = 2.344$, $p = .019$ ）。

Table 3-a
調査の実施状況

常葉学園短期大学「人間関係論」	1998年5月11日 講義内実施
静岡県中部看護専門学校「集団力学」	5月13日配付～5月20日回収
静岡大学共通教育「ことばと表現」	5月14日 講義内実施
静岡大学人文学部「社会心理学」	5月19日 講義内実施
静岡大学共通教育「歴史と文化」	6月11日 講義内実施
静岡大学共通教育「英語」	6月17日 講義内実施

Table 3-b
被験者数の内訳

	男子	女子	計
常葉学園短期大学「人間関係論」		49	49
静岡県中部看護専門学校「集団力学」	2	75	77
静岡大学共通教育「ことばと表現」	34	44	78
静岡大学人文学部「社会心理学」	44	41	85
静岡大学共通教育「歴史と文化」	53	51	104
静岡大学共通教育「英語」	33	1	34
合計	166	261	427

質問紙の構成

質問紙は、①対同性-有能性尺度、②基本的属性、③交友状況、④友だちとのつきあい方尺度から構成されている。

(1) 対同性-有能性

Buhrmester *et al.* (1988) は、先述した5領域に関する項目（開始、否定的主張、開示、情動的支援、コンフリクト処理）それぞれ8項目、全40項目から成る対人有能性尺度を開発した。諸井・浅野・伊藤・伊藤・渡邊（1999）は、女子短大生にこの尺度を実施したところ、対同性と対異性で、5次元が抽出されるものの構成項目が異なることを見出した。

本研究では、同性の友だちとのつきあい方を対象とするので、先行研究（諸井ら、1999）での尺度項目を利用して同性に対する対人的有能性を測定した。同性の人との日ごろの接し方を思い浮かべてもらい、40項目それぞれに、4点尺度で評定させた（“かなり得意である”～“かなり苦手である”）。得点は、対同性-有能性が高いほど高得点になるようにした。

(2) 基本的属性

被験者の性別、学年、年齢、居住状況、きょうだい構成、転校経験などについて尋ねた。

(3) 交友状況

被験者の同性および異性との関係の量的特徴や質的特徴について尋ねた。

同性との関係については“心のわかりあえる親友”と“友だち”の人数を回答させた上で、それぞれの関係に対する満足度を、4点尺度で回答させた（“かなり満足である”～“かなり不満足である”）。異性との関係の場合には、“心のわかりあえる親友”と“友だち”に加え、“恋人”の有無とその状態に対する満足度を同様に尋ねた。満足度については、当該の状態に満足しているほど、得点が高くなるようにした。

(4) 友だちとのつきあい方

落合・佐藤（1996）の友だちとのつきあい方に関する35項目から抽出された6因子（“防衛的”，“全方向的”，“自己自信”，“積極的相互理解”，“同調”，“被愛願望”）を枠組みとし、その因子内容に最も適していると思われる26項目を選出した。また、岡田（1991）の作成した友人関係尺度から11項目を選んだ。さらに、友だちとのつきあい方を表す項目を独自に11項目作成した。これら48項目を「友だちとのつきあい方」尺度構成項目とした（Appendix 1）。

まず、日ごろの被験者が営んでいる同性の友だちとのつきあいを想起させた。その上で、同性の友だちとのつきあいの中でとる行動や抱く気持ちに、48項目それぞれがどのくらいあてはまるかを4点尺度で評定させた（“かなりあてはまる”～“かなりあてはまらない”）。その項目に同意するほど、得点が高くなるようにした。

なお、項目の配列順効果を相殺するために、(1)では4タイプ、(4)では5タイプの配列順の異なる質問紙を使用した。

Ⅲ. 結果

交友状況

被験者の交友状況を Table 4 に示す。同性関係での量的特徴には男女差がなかった。しかし、質的特徴では、女子は、男子に比べて親友関係状態に満足していた。異性との関係をみると、男子に比べて、女子のほうで恋人をもつ者が多くいたが、親友数や友人数に差異はなかった。恋人や親友との関係状態に対する満足感女子のほうが高かった。したがって、全体として、女子のほうが親密な交際を営んでいると判断できよう。

Table 4
被験者の交友状況

		—同性—			
【人数】		【満足感】			
	親友	友人	親友	友人	
男子	3.65(4.40) N=165 (0~50; 0値 N=23)	23.80(22.07) N=165 (0~124; 0値 N=3)	3.27(.86) N=166	2.99(.73) N=166	
女子	3.43(2.38) N=261 (0~15; 0値 N=14)	20.84(17.32) N=261 (0~100; 0値 N=1)	3.44(.76) N=261	3.04(.76) N=261	
<hr/>					
男女差	$z = -.127$	$z = -.806$	$t = -2.10$ $df = 319.30$ $p = .036$	$t = -.73$ $df = 467$	
<hr/>					

		—異性—				
【人数】		【満足感】				
	恋人	親友	友人	恋人	親友	友人
男子	33/166	.98(1.70) N=166 (0~10; 0値 N=103)	8.02(11.35) N=165 (0~100; 0値 N=42)	2.18(1.02) N=163	2.50(.96) N=166	2.60(.88) N=166
女子	75/261	1.05(1.67) N=260 (0~15; 0値 N=140)	6.87(8.60) N=256 (0~80 ; 0値 N=52)	2.55(.99) N=253	2.71(1.00) N=257	2.72(.87) N=259
男女差	$\chi^2_{(1)} = 4.212$ $p = .040$	$z = -1.217$	$z = -.398$	$t = -3.58$ $df = 414$ $p = .001$	$t = -2.13$ $df = 421$ $p = .034$	$t = -1.40$ $df = 423$

対同性-有能性の基本的構造

男女別に以下の分析を行った。①項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と分散

($SD > .70$) のチェック, ②主成分分析 (直接 *oblimin* 法) による 5 次元性の確認, ③仮定次元への負荷の小さい項目の排除。①では, 各項目の平均値が 1.5 を有意に上回り, 3.5 を有意に下回りを調べ, 不適切なものは分析対象から外すことにした。②については, この尺度が Buhrmester *et al.* (1988) が仮定したように 5 次元から構成されることを確認した。③では, 5 主成分の斜交回転後の負荷量に基づき, 仮定された主成分への負荷量が十分に大きく ($\geq .400$), 他の主成分への負荷が小さいこと ($< .400$) を調べた。不適切な項目を除き再度主成分分析を行い, 仮定通りの負荷量のパターンが得られるまで, このことを繰り返した。

(1) 男子

項目平均値の偏りとの分散のチェックは, 全 40 項目が適切であることを示した。40 項目を対象とした主成分分析 (直接 *oblimin* 法) を行ったら, 仮定通りの 5 主成分が得られた (初期固有値 ≥ 1.602 , 説明率 47.0%)。しかし, 9 項目 (「開示」の項目 18, 38, 33, 「コンフリクト処理」の項目 5, 35, 15, 20, 30, 「情動的支援」の項目 29) が不適切な負荷のパターンをみせたので, これらを除く 31 項目を対象とした分析を行ったら, 明確な解が得られた。これを Table 5-a に示す。

(2) 女子

男子と同様に①のチェックを経て, 40 項目を対象とした主成分分析 (直接 *oblimin* 法) を行い, 仮定通りの傾向を得た (初期固有値 ≥ 1.838 , 説明率 47.0%)。負荷のパターンが不適切である 4 項目 (「否定的主張」の項目 17, 「開示」の項目 33, 「情動的支援」の項目 9, 「コンフリクト処理」の項目 30) を削除した 36 項目を対象とした分析を再度行ったら, Table 5-b に示すように, 明確なパターンが現れた。

(3) 下位尺度得点の算出

主成分分析の結果に基づき, 各主成分に .400 以上の負荷をみせた項目を下位尺度項目とした。その上で下位尺度ごとに信頼性の検討を行った。

男子では $\alpha = .644 \sim .835$, 女子では $\alpha = .657 \sim .867$ であり, まずまずの値が得られた。当該項目と当該項目を除く合計得点との間の相関値をみても十分な値が現れたので, 下位尺度構成項目の平均得点を下位尺度得点とした。

次に下位尺度得点と尺度中性点 (2.5 点) の比較を試みた。男女ともに, “開始”, “否定的主張”, “開示” は有意に 2.5 点を下回り, “情動的支援”, “コンフリクト処理” は有意に 2.5 点を上回った。下位尺度得点相互の比較を行うと,

Table 5-a

対同性-有能性尺度に関する主成分分析(直接 oblimin 法, $\delta=0$)の結果: 主成分負荷量パターン・マトリックス 一男子-

	I	II	III	IV	V
【開始】 $\alpha = .835, m = 2.24, SD = .54, Z = 1.000, p = .270$					
1 新しく知り合った人に、一緒に何かしないかと提案する。	.743	.047	-.022	.064	-.099
6 新しく知り合った人と一緒にできることを見つける。	.638	.128	.245	-.002	-.217
11 知り合いになりたいと思う人に話しかける。	.690	.045	-.039	.189	-.112
16 新しく知り合った人が楽しくなるような行動をとってあげる。	.506	.037	.286	-.058	-.048
21 あなたが知り合いになりたいと思う人に、自己紹介をする。	.669	-.136	-.056	.189	.247
26 新しく知り合った人に、一緒に何かしないかと、電話をかける。	.654	-.023	-.005	.099	-.190
31 あなたが友だちになりたいと思う人の前で、第一印象をよくしようとする。	.640	-.000	.101	-.089	.155
36 友だちをつくるために、パーティーや集まりに参加する。	.636	-.096	.010	-.027	.090
【否定的主張】 $\alpha = .823, m = 2.24, SD = .53, Z = .848, p = .468$					
2 あなたに対する接し方が気に入らないと、相手に告げる。	-.009	-.770	-.098	.093	-.026
7 あなたがやりたくないことをして欲しいと知り合いに頼まれたとき、「いやだ」と断る。	-.044	-.517	.111	.031	-.304
12 相手の不当な要求を断る。	-.013	-.586	.254	-.125	-.030
17 相手があなたを無視したり思いやりに欠けると、その相手を責める。	.230	-.625	-.192	.032	.186
22 相手があなたを困らせることをしていると、その相手に告げる。	.061	-.672	.043	.141	.037
27 相手が約束を破ったときは、その相手を問いつめる。	-.055	-.639	.026	-.025	.042
32 相手があなたの気持ちを傷つけたと、その相手に告げる。	-.202	-.588	.133	.287	-.152
37 相手があなたを怒らせることをしたと、その相手に告げる。	.048	-.691	-.019	-.111	-.226
【開示】 $\alpha = .644, m = 2.01, SD = .50, Z = 1.287, p = .073$					
3 知り合ったばかりの人と話をしているときに、あなた自身の内密なことをもらす。	.055	-.089	-.077	.559	.112
8 新しい友だちを信頼して、あなたの弱いところや傷つきやすいところを見せる。	.041	.119	-.169	.798	-.084
13 あなたが恥ずかしいと思っている自分に関する部分を、親しい友だちに話す。	-.027	.005	.161	.669	-.059
23 あなたの「外側の殻」を打ち破って、親しい友だちへの信頼を深める。	.099	-.207	.204	.442	-.005
28 あなたの心の中の不安や恐れていることを、親しい友だちに話す。	.096	-.051	.036	.528	.008
【情動的支援】 $\alpha = .808, m = 2.72, SD = .52, Z = 1.092, p = .184$					
4 親しい友だちが人生の重大な決断(たとえば、職業選択や結婚など)をするのを、助けてあげる。	.173	-.137	.557	-.123	-.086
9 友だちが何か「うつぶんを晴らす」のを、気を遣いながら耳を傾ける。	-.017	.092	.513	.075	.178
14 親しい友だちが直面している問題の核心や要点をつかむことができるように、助けてあげる。	.085	-.053	.770	.042	-.132
19 親しい友だちが家族や友人関係に関する問題を解決するのを、助けてあげる。	.176	-.174	.639	.030	.025
24 友だちが取り乱しているときでも、真剣に耳を傾けてあげる。	-.055	.060	.713	.039	-.054
34 友だちが抱えている問題にあなたが関心がないときでも、本当にその友だちの立場に立った気遣いを見せる。	.050	.005	.577	.048	.184
39 親しい友だちが何か援助を必要としているとき、アドバイスを与えてあげる。	.077	-.085	.705	-.076	.069
【コンフリクト処理】 $\alpha = .668, m = 2.90, SD = .67, Z = 1.809, p = .003$					
10 親しい友だちとけんかをしているとき、その友だちに対する不満を心の隅にしまう。	-.145	.186	.232	.137	.565
25 大きな争いになりそうなことについては、言うことを控える。	.035	-.055	-.074	-.215	.819
40 大きな争いを避けるために、親しい友だちに対して感情を爆発させない。	-.092	.154	.179	.120	.693
【主成分間相関】					
	I	II	III	IV	V
I	1.000				
II	-.214	1.000			
III	.273	-.125	1.000		
IV	.200	-.161	.103	1.000	
V	-.055	.208	.064	.006	1.000

N=166 初期固有値 ≥ 1.438 , 初期説明率50.2% α 値: 最終構成項目での α 係数; m 値: 構成項目の合計得点を項目数で割った値; SD 値: 標準偏差

Z値: 正規性の検定 (Kolmogorov-Smirnov の適合度検定)

Table 5-b

対同性一有能性尺度に関する主成分分析(直接 oblimin 法, $\delta=0$)の結果: 主成分負荷量パターン・マトリックス 一女子一

	I	II	III	IV	V
【開始】 $\alpha = .827, m = 2.43, SD = .52, Z = 1.612, p = .011$					
1 新しく知り合った人に、一緒に何かしなないと提案する。	.624	-.052	.102	-.096	-.142
6 新しく知り合った人と一緒にできることを見つける。	.664	.042	.063	-.121	.043
11 知り合いになりたいと思う人に話しかける。	.518	-.135	.133	-.051	-.044
16 新しく知り合った人が楽しくなるような行動をとってあげる。	.598	.074	.071	-.176	-.024
21 あなたが知り合いになりたいと思う人に、自己紹介をする。	.732	-.127	.016	.066	.032
26 新しく知り合った人に、一緒に何かしなないと、電話をかける。	.658	-.077	.040	-.029	-.017
31 あなたが友だちになりたいと思う人の前で、第一印象をよくしようとする。	.507	-.010	.078	.037	.118
36 友だちをつくるために、パーティーや集まりに参加する。	.684	-.019	-.091	-.007	-.032
【否定的主張】 $\alpha = .792, m = 2.02, SD = .47, Z = 1.308, p = .065$					
2 あなたに対する接し方が気に入らないと、相手に告げる。	-.051	-.648	-.044	-.074	.013
7 あなたがやりたくないことをして欲しいと知り合いに頼まれたとき、「いやだ」と断る。	.039	-.705	-.154	.081	.034
12 相手の不当な要求を断る。	-.032	-.675	-.043	.115	.059
22 相手があなたを困らせることをしていると、その相手に告げる。	.087	-.628	.044	.024	-.124
27 相手が約束を破ったときは、その相手を問いつめる。	.047	-.453	.068	-.005	-.124
32 相手があなたの気持ちを傷つけたと、その相手に告げる。	.081	-.716	.067	-.146	.071
37 相手があなたを怒らせることをしたと、その相手に告げる。	.155	-.724	.026	-.014	-.011
【開示】 $\alpha = .825, m = 2.33, SD = .56, Z = 1.333, p = .057$					
3 知り合ったばかりの人と話をしているときに、あなた自身の内密なことをもらす。	.100	.037	-.213	-.701	.130
8 新しい友だちを信頼して、あなたの弱いところや傷つきやすいところを見せる。	.130	-.052	-.072	-.727	.055
13 あなたが恥ずかしいと思っている自分に関する部分を、親しい友だちに話す。	-.022	-.069	.000	-.690	.161
18 「本当のあなた」を新しい友だちに知ってもらう。	.394	.005	-.063	-.546	-.040
23 あなたの「外側の殻」を打ち破って、親しい友だちへの信頼を深める。	.238	.053	.230	-.546	-.087
28 あなたの心の中の不安や恐れていることを、親しい友だちに話す。	-.040	.043	.234	-.642	-.118
38 本当にお互いのことを分かり合うために、知り合いと親密に話をする。	.162	.033	.294	-.459	-.188
【情動的支援】 $\alpha = .867, m = 2.72, SD = .52, Z = 1.608, p = .011$					
4 親しい友だちが人生の重大な決断(たとえば、職業選択や結婚など)をするのを、助けてあげる。	.035	.012	.722	.037	.021
14 親しい友だちが直面している問題の核心や要点をつかむことができるように、助けてあげる。	-.004	-.077	.725	-.014	-.077
19 親しい友だちが家族や友人関係に関する問題を解決するのを、助けてあげる。	.007	-.055	.778	-.025	.074
24 友だちが取り乱しているときでも、真剣に耳を傾けてあげる。	-.006	-.000	.702	.097	.189
29 親しい友だちの気分が沈んでいるとき、言葉をかけたり、何かしてあげたりする。	.092	.094	.700	-.068	-.040
34 友だちが抱えている問題にあなたが関心がないときでも、本当にその友だちの立場に立った気遣いを見せる。	.089	.101	.643	-.022	.126
39 親しい友だちが何か援助を必要としているとき、アドバイスを与えてあげる。	.132	.022	.793	.068	-.122
【コンフリクト処理】 $\alpha = .657, m = 2.78, SD = .42, Z = 1.575, p = .014$					
5 親しい友だちと大きないさかいになり始めたとき、自分のほうが悪かったと認める。	-.092	.121	.096	-.140	.527
10 親しい友だちとけんかをしているとき、その友だちに対する不満を心の隅にしまう。	.041	.178	-.091	.147	.586
15 親しい友だちと争いになったときでも、その友だちの不満に心から耳を傾けてあげる。	.060	-.179	.323	.014	.594
20 けんかをしているときでも、友だちの立場に立って、その友だちの意見を本当に理解する。	-.100	-.272	.279	-.179	.601
25 大きな争いになりそうなことについては、言うことを控える。	.232	.227	-.133	.255	.502
35 友だちと考え方が一致しなくても、その友だちが妥当な考え方をしていると認める。	-.049	-.021	-.022	-.167	.521
40 大きな争いを避けるために、親しい友だちに対して感情を爆発させない。	.185	.210	-.083	.300	.480
{主成分間相関}					
	I	II	III	IV	V
I	1.000				
II	-.140	1.000			
III	.314	-.161	1.000		
IV	-.281	.174	-.265	1.000	
V	.032	.166	.071	.042	1.000

N=261 初期固有値 ≥ 1.815 , 初期説明率49.2%

α 値: 最終構成項目での α 係数; m 値: 構成項目の合計得点を項目数で割った値; SD 値: 標準偏差

Z 値: 正規性の検定 (Kolmogorov-Smirnov の適合度検定)

男子では「コンフリクト処理」>「情動的支援」>「開始」=「否定的主張」>「開示」, 女子では「コンフリクト処理」>「情動的支援」>「開始」>「開示」>「否定的主張」の傾向がそれぞれ認められた ($p < .05$)。

(4) 項目水準での男女比較

男女ともに対人有能性の5次元性が確認されたが, 下位尺度構成項目が異なるので, 項目水準で男女の平均値比較を試みた。その結果の要約をTable 5-cに表す。「否定的主張」有能性項目では, 男子のほうが高い得点を示す項目が多くみられたが, 他の領域の有能性項目では, 女子のほうが高い得点である項目が多かった。

Table 5-c
対同性-有能性尺度項目水準での男女差: t 検定の要約

〔開始〕	女子>男子
$p < .05$: 項目11, 21, 26, 31	
$p < .10$: 項目16	
〔否定的主張〕	男子>女子
$p < .05$: 項目2, 7, 12, 22, 27, 37	
〔開示〕	女子>男子
$p < .05$: 項目8, 13, 18, 23, 28, 33, 38	
〔情動的支援〕	女子>男子
$p < .05$: 項目19, 24, 29, 34	
〔コンフリクト処理〕	女子>男子
$p < .05$: 項目30	
$p < .10$: 項目15, 20, 35	

友だちとのつきあい方の基本的構造

友だちとのつきあい方の基本的構造を同定するために, 男女別に以下の分析を行った。①項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と分散 ($SD > .70$) のチェック, ②主成分分析 (直接 *oblimin* 法) による次元数の確定, ③仮定次元への負荷の小さい項目の排除。①は, 対同性-有能性尺度と同様である。②については, 初期固有値 1.000 を満たす主成分解を求め, 斜交回転後の負荷量の絶対値 .400 を基準として, 最も解釈可能な解を同定した。③では, ②で最も明解であった主成分解の斜交回転後の負荷量に基づき, 仮定された主成分への負荷量が十分に大きく ($\geq .400$), 他の主成分への負荷が小さい ($< .400$) 項目に限定して再度主成分分析を行った。このことを明解な負荷量のパターンが得られるまで反復した。

(1) 男子

①のチェックによって不適と判断された項目 32 の平均値を除く 47 項目を対象として主成分分析が行われ, 12 主成分解までが検討された。その結果, 5 主成分解がもっと解釈可能であることが明らかになった。

斜交回転後の負荷量が曖昧であった 6 項目 (項目 10, 13, 16, 28, 29, 42) を除く 41 項目で再分析を行ったところ, 項目 21 が不十分な負荷であったので, これを除く 40 項目を対象として 3 回目の分析を行った。その結果, 明確な負荷量のパ

ターンを得ることができた。これを Table 6-a に示す。

第Ⅰ主成分は、まわりの他者との意見の同調や対立の回避を表す項目の負荷が高く、“周囲への同調”と命名した。第Ⅱ主成分に負荷が高い項目は、相互の内面に積極的に触れることを表しているのので、この主成分は、“積極的相互理解”と名づけた。第Ⅲ主成分では、友だちの輪の拡大を望むことを示す項目の負荷が高いため、“全方向的志向”とした。自分の内面を相手に曝さないように防衛的にふるまうことを表す項目で負荷が高い第Ⅳ主成分は、“自己隠蔽”と名づけた。第Ⅴ主成分は、まわりのだれから好意をもたれたいという願望を示す項目の負荷が高く、“被愛願望”とした。なお、この主成分を代表する項目の負荷量はすべて負であるが、理解の容易さを考慮して、この主成分の命名は負荷量の方向と逆にした。

(2) 女子

①のチェックでは、項目 4 と 32 が不適切であると判断されたので、残り 46 項目で主成分分析を行った。10 主成分までが探索的に検討されたが、6 主成分解が明解であると判断された。

斜交回転後の負荷量が曖昧である項目を除去して主成分分析を繰り返した（1 回目 5, 38, 33, 20, 35, 41, 16; 2 回目 : 31, 19, 3, 45, 25）。34 項目を対象とする 3 回目の分析で、負荷量のパターンが明確である 6 主成分解が得られた。最後の 6 主成分の内容は、最初のものとはほとんど変わらなかった。しかし、負荷量 .400 を基準として下位尺度構成項目を選び、それぞれで下位尺度の信頼性を検討すると、第Ⅵ主成分の α 係数が、.504 というきわめて低い値であった。

このため、第Ⅵ主成分に負荷の高い 4 項目（24, 10, 42, 40）を除き 5 主成分解を求めた。その結果をみると、6 主成分解の第Ⅰ～第Ⅴ主成分の代表項目と 5 主成分解の第Ⅰ～第Ⅴ主成分の代表項目が完全に一致していた。本研究では、この 5 主成分解を採用することにした。これを Table 6-b に示す。

第Ⅰ主成分、第Ⅱ主成分、第Ⅲ主成分、第Ⅳ主成分は、男子の主成分にほぼ対応していると解釈できるので、それぞれ“周囲への同調”、“自己隠蔽”、“全方向的志向”、“被愛願望”と名づけた。なお、第Ⅱ主成分と第Ⅲ主成分は、負荷の方向が逆であるが、男子の主成分名に対応させた。第Ⅴ主成分は、まわりの者とのいさかきの回避を表す項目の負荷が高いため、“衝突回避”と名づけた。

(3) 下位尺度得点の算出

採用解での負荷量 .400 を基準として下位尺度項目を選抜した。当該の主成分概念に一致するほど得点が高くなるように項目得点を調整した上で、下位尺

Table 6-a

友だちとのつきあい方尺度に関する主成分分析(直接 *oblimin* 法, $\delta = 0$)の結果: 主成分負荷量パターン・マトリックス 一男子一

	I	II	III	IV	V
[I. 周囲への同調] $\alpha = .879, m = 2.24, SD = .54, Z = .853, p = .461$					
24 友だちと意見が対立しても、自信をなくさないで話し合える。	-.771	-.072	.139	-.158	-.105
9 まわりのみんなと何でも同じようにしていきたい。	.731	-.043	.320	.003	.028
47 友だちと同じようにふるまうべきである。	.728	-.073	.257	-.082	.034
15 まわりのみんなと意見が合するようにしたい。	.697	.051	.082	.036	-.107
37 まわりのみんなと同じことをしたい。	.685	.005	.160	-.154	-.159
26 まわりのみんなと同じ意見を示すほうが気楽である。	.645	-.052	-.075	.067	-.119
40 友だちと意見を交わしあっても、それほど感わされない。	-.635	-.156	.128	-.056	-.044
20 まわりのみんなと意見が違っても、できるだけ自分の意見を言うようにしている。	-.619	.294	.189	-.067	.043
3 友だちと意見が対立するのが怖い。	.573	-.097	.090	.206	-.133
35 友だちと意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりはしない。	-.553	.032	.305	.227	.042
48 やりたくないことでも、友だちと一緒にだと仕方なくやってしまう。	.470	.165	.030	.153	-.176
[II. 積極的相互理解] $\alpha = .863, m = 2.84, SD = .57, Z = .939, p = .341$					
19 友だちと自分のお互いの心を打ち明けるようにしたい。	.120	.783	-.024	-.086	-.139
4 本当の姿を見せ合える友だちほど重要なものはない。	.133	.771	-.020	.149	.009
8 友だちと精神的に深い関係をもちたい。	.028	.764	.124	.194	-.126
36 友だちとは少しぐらい傷ついても本当のことを言い合いたい。	-.093	.745	-.030	-.167	.029
31 友だちとは上辺でつきあうのではなく、本当の姿を見せ合いたい。	.059	.668	-.029	-.201	.052
46 友だちには何でも話して欲しい。	-.176	.644	.076	-.028	-.183
30 友だちと本当の姿を見せ合うことで、少しぐらい傷ついてもかまわない。	-.061	.558	.036	-.251	.104
25 友だちと分かり合おうとして傷ついても仕方ない。	-.207	.512	.130	-.099	.361
[III. 全方向的志向] $\alpha = .847, m = 2.80, SD = .66, Z = 1.163, p = .134$					
43 どんな友だちとも仲良しでいたい。	.060	-.011	.834	-.038	-.074
44 どんな友だちとも楽しくつきあいたい。	.086	.028	.795	-.009	-.049
11 友だち以外の人でも仲良くしたい。	-.153	.034	.717	.017	.001
2 どんな人とも友だちになりたい。	.030	.073	.679	.043	-.063
7 どんな友だちとも協調し合いたい。	.096	.108	.578	.101	-.329
[IV. 自己隠蔽] $\alpha = .826, m = 2.54, SD = .54, Z = .815, p = .520$					
6 友だちにはありのままの自分を出せない。	.127	.132	.062	.826	.089
12 傷つきたくないのに、友だちには本当の姿を見せられない。	.213	.040	-.030	.750	-.007
1 友だちに自分のすべてをさらけ出すのは危険である。	.072	-.028	.069	.731	-.026
34 友だちには自分の本心を見せたくない。	-.110	-.087	.000	.725	-.018
17 友だちとは何でも本音で話し合うようにしている。	.054	.331	-.009	-.478	-.019
23 友だちには自分の考えていることを全部言う必要はない。	-.227	-.128	-.045	.473	.006
39 友だちとは当たり障りのない会話ですませている。	.183	-.193	-.069	.432	-.143
45 友だちと本音でぶつかり合っても平気である。	-.396	.228	-.096	-.408	.021
[V. 被愛願望] $\alpha = .862, m = 2.90, SD = .61, Z = 1.475, p = .026$					
38 誰からもよい人だと思われたい。	.100	-.129	.197	-.146	-.735
41 まわりのみんなから愛されていたい。	.053	.037	.256	-.081	-.720
5 まわりのみんなから好かれていたい。	.037	.029	.245	.057	-.714
14 友だちからどう思われるか気になる。	.225	.069	-.221	-.015	-.676
33 誰にでも好印象を与えたい。	.079	-.027	.369	-.074	-.638
22 友だちと楽しい雰囲気になるように気を遣っている。	-.130	.040	.089	-.096	-.630
27 誰かに嫌われていると想像すると不安になる。	.242	.105	-.013	.123	-.568
18 友だちを傷つけないように注意を払っている。	-.144	.060	-.206	.287	-.542
(主成分間相関)					
	I	II	III	IV	V
I	1.000				
II	-.047	1.000			
III	.021	.150	1.000		
IV	.154	-.283	-.051	1.000	
V	-.304	-.075	-.260	-.187	1.000

N=166 初期固有値 ≥ 1.730 , 初期説明率55.5% α 値: 最終構成項目での α 係数; m 値: 構成項目の合計得点を項目数で割った値; SD 値: 標準偏差 Z 値: 正規性の検定 (Kolmogorov-Smirnov の適合度検定)

Table 6- b

友だちとのつきあい方尺度に関する主成分分析(直接 *oblimin* 法, $\delta=0$)の結果: 主成分負荷量パターン・マトリックス 一女子一

	I	II	III	IV	V
【I. 周囲への同調】 $\alpha = .819$, $m = 2.32$, $SD = .56$, $Z = 1.615$, $p = .011$					
9 まわりのみんなと何でも同じようにしていたい。	.809	-.076	-.004	.027	-.098
37 まわりのみんなと同じことをしたい。	.818	.044	.086	.102	-.025
47 友だちと同じようにふるまうべきである。	.633	.104	-.067	.096	-.183
15 まわりのみんなと意見を合わせるようにしたい。	.752	-.017	-.040	-.019	.135
26 まわりのみんなと同じ意見を示すほうが気楽である。	.691	-.027	-.027	-.128	.218
48 やりたくないことでも、友だちと一緒にだと仕方なくやってしまう。	.458	-.032	-.123	.058	.177
【II. 自己隠蔽】 $\alpha = .867$, $m = 2.32$, $SD = .52$, $Z = 1.480$, $p = .025$					
34 友だちには自分の本心を見せたくない。	-.057	-.798	-.130	-.097	-.048
12 傷つきたくないのに、友だちには本当の姿を見せられない。	.064	-.814	-.034	.161	-.061
6 友だちにはありのままの自分を出せない。	.063	-.778	-.070	.070	-.068
1 友だちに自分のすべてをさらけ出すのは危険である。	-.110	-.714	.040	.134	.108
17 友だちとは何でも本音で話し合うようにしている。	-.012	.691	.002	.216	-.061
39 友だちとは当たり障りのない会話ですませている。	.188	-.630	-.056	.052	-.073
28 自信をなくされるくらいなら、友だちと関わらないほうがよい。	-.061	-.520	.151	.202	-.006
23 友だちには自分の考えていることを全部言う必要はない。	-.094	-.523	.022	-.028	.039
36 友だちとは少しぐらい傷ついても本当のことを言い合いたい。	-.147	.558	-.037	.397	-.124
30 友だちと本当の姿を見せ合うことで、少しぐらい傷ついててもかまわない。	-.138	.550	-.061	.202	-.178
【III. 全方向的志向】 $\alpha = .841$, $m = 2.82$, $SD = .63$, $Z = 1.194$, $p = .116$					
44 どんな友だちとも楽しくつきあいたい。	.092	.018	-.788	.041	.046
43 どんな友だちとも仲良しでいたい。	.096	-.026	-.771	.046	.089
2 どんな人とも友だちになりたい。	.119	-.006	-.759	.153	-.147
11 友だち以外の人でも仲良くしたい。	-.222	-.081	-.747	.213	.096
13 自分がきらいだと思う人とはつきあわないようにしている。	.036	-.060	.653	.374	.023
7 どんな友だちとも協調し合いたい。	.277	-.014	-.547	.163	.130
【IV. 被愛願望】 $\alpha = .727$, $m = 3.11$, $SD = .54$, $Z = 1.980$, $p = .001$					
21 友だちに自分のことを理解してもらえないと自信がもてなくなる。	.145	-.127	.006	.661	-.051
27 誰かに嫌われていると想像すると不安になる。	.249	-.200	-.083	.599	.096
14 友だちからどう思われるか気になる。	.185	-.171	-.200	.551	.090
46 友だちには何でも話して欲しい。	.052	.390	-.064	.554	.136
8 友だちと精神的に深い関係をもちたい。	-.109	.201	-.186	.569	.119
【V. 衝突回避】 $\alpha = .610$, $m = 3.08$, $SD = .48$, $Z = 3.255$, $p = .001$					
18 友だちを傷つけないように注意を払っている。	.076	.076	.023	.010	.777
29 まわりの人と争いごを起こさないようにしている。	.116	-.267	-.010	-.095	.671
22 友だちと楽しい雰囲気になるように気を遣っている。	-.104	.059	-.072	.143	.658
(主成分間相関)					
	I	II	III	IV	V
I	1.000				
II	-.201	1.000			
III	-.253	-.079	1.000		
IV	.171	.061	-.199	1.000	
V	.157	-.170	-.213	.091	1.000

N=261 初期固有値 ≥ 1.428 , 初期説明率55.2% α 値: 最終構成項目での α 係数; m 値: 構成項目の合計得点を項目数で割った値; SD 値: 標準偏差 Z 値: 正規性の検定 (Kolmogorov-Smirnovの適合度検定)

度ごとに信頼性の検討を行った。

各下位尺度での α 係数を求めると、男子では.826～.879、女子では.610～.867であった。当該項目と当該項目を除く合計得点との間の相関値も十分な値であったので、下位尺度構成項目の平均得点を下位尺度得点とした。

次に下位尺度得点と尺度中性点（2.5点）の比較を行った。男子では、“周囲への同調”が有意に2.5点を下回り、“積極的相互理解”、“全方向的志向”、“被愛願望”は有意に2.5点を上回った。“自己隠蔽”は尺度中性点と異ならなかった。女子では、“周囲への同調”、“自己隠蔽”が有意に2.5点を下回り、“全方向的志向”、“被愛願望”、“衝突回避”は有意に2.5点を上回った。

(4) 高次構造の探索

男女それぞれで5個の下位尺度得点が算出されたが、友だちとのつきあい方の高次構造を探るために、これら5得点を対象として主成分分析（直接 *oblimin* 法）を試みた。これらの結果を Table 7-a、7-b に示す。

男子では2主成分解が得られた。第Ⅰ主成分は、“被愛願望”、“全方向的志向”、“周囲への同調”に高い負荷をみせ、“全方向的志向”と解釈された。第Ⅱ主成分では、“積極的相互理解”と“自己隠蔽”の負荷が高く、“親密化志向”の軸を表していると判断できる。女子でも、同様に2主成分解が検討された。第Ⅰ主成分は、男子の“全方向的志向”と対応していた。第Ⅱ主成分は、“自己隠蔽”と“衝突回避”の

Table 7-a

友だちとのつきあい方下位尺度5得点に関する主成分分析(直接 *oblimin* 法, $\delta=0$)の結果:
主成分負荷量パターン・マトリックス —男子—

	I	II
〔Ⅰ. 全方向的志向〕		
V. 被愛願望	.872	-.078
Ⅲ. 全方向的志向	.762	.301
I. 周囲への同調	.580	-.439
〔Ⅱ. 親密化志向〕		
Ⅱ. 積極的相互理解	.247	.822
Ⅳ. 自己隠蔽	.175	-.816
{主成分間相関}		-.057

N=166

初期固有値 ≥ 1.554 , 初期説明率68.1%

Table 7-b

友だちとのつきあい方下位尺度5得点に関する主成分分析(直接 *oblimin* 法, $\delta=0$)の結果:
主成分負荷量パターン・マトリックス —女子—

	I	II
〔Ⅰ. 全方向的志向〕		
Ⅳ. 被愛願望	.829	-.133
Ⅲ. 全方向的志向	.817	-.055
I. 周囲への同調	.580	.380
〔Ⅱ. 表面的志向〕		
Ⅱ. 自己隠蔽	-.232	.918
V. 衝突回避	.349	.569
{主成分間相関}		.178

N=261

初期固有値 ≥ 1.181 , 初期説明率64.3%

負荷が高く、“表面的志向”と名づけた。男子の第Ⅱ主成分と女子の第Ⅱ主成分は、逆概念の関係にある。男女それぞれで、回帰法によって主成分得点を算出した。

対人有能性と友だちとのつきあい方との関連

対同性-有能性が友だちとのつきあい方におよぼす影響を検討するために、一連の重回帰分析を行った。まず、友だちのつきあい方下位尺度得点それぞれを目的変数とし、対同性-有能性下位尺度得点を説明変数とする分析を男女それぞれで行った（分析1）。次に、友だちとのつきあい方に関する高次主成分分析で得られた主成分得点を目的変数とし、対同性-有能性下位尺度得点を説明変数とした分析が試みられた（分析2）。

(1) 分析1

友だちのつきあい方下位尺度得点をそれぞれ目的変数とした重回帰分析に関する結果を Table 8-a, 8-b に示す。

Table 8-a

友だちとのつきあい方5得点におよぼす対同性-有能性5得点の影響：重回帰分析の結果（標準化偏回帰係数）—男子—

	I. 周囲への同調	II. 積極的相互理解	III. 全方向的志向	IV. 自己隠蔽	V. 被愛願望
[対同性-有能性下位尺度得点]					
I. 開始	.196 $p=.020$.068	.327 $p=.001$.042	.268 $p=.003$
II. 否定的な主張	-.275 $p=.001$.093	-.121	-.142	-.145 $p=.094$
III. 開示	.083	.081	-.079	-.353 $p=.001$	-.070
IV. 情動的支援	-.346 $p=.001$.300 $p=.001$.096	-.225 $p=.004$.004
V. コンフリクトの処理	.112	-.119	.103	.214 $p=.004$.174 $p=.037$
R^2	.200 $p=.001$.177 $p=.001$.137 $p=.001$.310 $p=.001$.109 $p=.002$

$N=166$

Table 8-b

友だちとのつきあい方5得点におよぼす対同性-有能性5得点の影響：重回帰分析の結果（標準化偏回帰係数）—女子—

	I. 周囲への同調	II. 自己隠蔽	III. 全方向的志向	IV. 被愛願望	V. 衝突回避
[対同性-有能性下位尺度得点]					
I. 開始	.148 $p=.038$.038	.394 $p=.001$.166 $p=.025$.193 $p=.005$
II. 否定的主張	-.268 $p=.001$	-.027	-.244 $p=.001$	-.235 $p=.001$	-.240 $p=.001$
III. 開示	.036	-.569 $p=.001$.052	.163 $p=.024$	-.156 $p=.019$
IV. 情動的支援	-.273 $p=.001$	-.195 $p=.001$	-.123 $p=.056$	-.028	.016
V. コンフリクト処理	.130 $p=.034$.071	.200 $p=.001$	-.092	.318 $p=.001$
R^2	.152 $p=.001$.436 $p=.001$.222 $p=.001$.095 $p=.001$.228 $p=.001$

$N=261$

a)男子： 友だちとのつきあい方 5 得点すべてで有意な関連が認められた。“開始”有能性は交友の広がりを用意に促進していた（“周囲への同調”，“全方向的志向”，“被愛願望”で正の偏回帰係数）。“否定的主張”有能性は，交友の広がりを用意に抑制する働きを示した（“周囲への同調”で負，“被愛願望”で負の傾向性）。“開示”有能性は，“自己隠蔽”を用意に抑制する働きがあった。

“情動的支援”有能性や“コンフリクト処理”有能性は，交友の広がりと関係の親密化の両方に関わっていた。“情動的支援”有能性は，交友の広がりや抑制するとともに（“周囲への同調”で負），関係の親密化を促進する傾向があった（“積極的相互理解”で正，“自己隠蔽”で負）。“コンフリクト処理”は，交友拡大動機を高めるとともに（“被愛願望”で正），関係親密化を妨げる傾向にあった（“自己隠蔽”で正）。

b)女子： 5つの分析すべてで有意な関連が認められた。“開始”有能性は，交友の広がりを用意に促進するとともに（“周囲への同調”，“全方向的志向”，“被愛願望”で正），“衝突回避”傾向も高めた。対照的に，“否定的主張”有能性は，交友の広がりを用意に抑制し（“周囲への同調”，“全方向的志向”，“被愛願望”で負），“衝突回避”も有意に抑制した。

“開示”有能性は，関係の親密化を用意に促進するが（“自己隠蔽”で負），“被愛願望”を高める反面，“衝突回避”を抑える傾向にあった。“情動的支援”有能性は，交友の広がりを用意に抑える反面（“周囲への同調”で負，“全方向的志向”で負の傾向性），関係の親密化を用意に回避する傾向にあった（“自己隠蔽”で負）。“コンフリクト処理”有能性は，交友の広がりを用意に促進するといえる（“周囲への同調”，“全方向的志向”，“衝突回避”で正）。

(2) 分析 2

友だちとのつきあい方に関する高次主成分分析で得られた主成分得点を説明変数とした場合を Table 9-a, 9-b に示す。

a)男子： 全方向的志向と親密化志向ともに有意な関連が認められた。全方向的志向では，“開始”が正の規定因，“否定的主張”が負の規定因であった。また，“コンフリクト処理”も正の傾向性を示した。親密化志向では，“否定的主張”，“開示”，“情動的支援”が親密化を用意に促進し，“コンフリクト処理”が親密化を妨げる傾向性がみられた。

b)女子： 2つの分析で有意な関連が得られた。全方向的志向では，“開始”と“開示”が交友の幅を広げる動機づけを用意に高め，“否定的主張”は逆に交友の幅を用意に狭くする傾向をもたらす。表面的志向の場合，“開示”や“情動的

支援”が関係親密化動機を有意に促し，“コンフリクト処理”は浅い関係を有意に志向させる。また，“否定的主張”は負の傾向性をみせた。

Table 9-a

友だちとのつきあい方2主成分得点におよぼす対同性-有能性5得点の影響：重回帰分析の結果（標準化偏回帰係数）—男子—

	I. 全方向的志向	II. 親密化志向
〔対同性-有能性下位尺度得点〕		
I. 開始	.353 $p = .001$.035
II. 否定的主張	-.202 $p = .018$.160 $p = .034$
III. 開示	-.051	.179 $p = .013$
IV. 情動的支援	-.022	.371 $p = .001$
V. コンフリクト処理	.158 $p = .053$	-.174 $p = .017$
R^2	.154 $p = .001$.324 $p = .001$

$N = 166$

Table 9-b

友だちとのつきあい方2主成分得点におよぼす対同性-有能性5得点の影響：重回帰分析の結果（標準化偏回帰係数）—女子—

	I. 全方向的志向	II. 表面的志向
〔対同性-有能性下位尺度得点〕		
I. 開始	.306 $p = .001$.050
II. 否定的主張	-.310 $p = .001$	-.094 $p = .069$
III. 開示	.249 $p = .001$	-.510 $p = .001$
IV. 情動的支援	-.085	-.175 $p = .002$
V. コンフリクト処理	.095	.197 $p = .001$
R^2	.243 $p = .001$.408 $p = .001$

$N = 261$

対人有能性、友だちとのつきあい方、および同性-交友状況の関連

男女別に以下の分析を行った。対人有能性下位尺度5得点、友だちとのつきあい方5得点、同性-交友状況4測度（親友数、友人数、親友状態満足感、友人状態満足感）を対象とする主成分分析（直接 *oblimin* 法）を行った。なお、親友数と友人数は対数変換した値を用いた（ $\log < 1 + x >$ ）。初期固有値 1.000 を

基準に各解を検討したが、男女ともに2主成分で興味深い結果が現れた。これらの結果を Table 10-a, 10-b に示す。

まず男子の結果を述べる。第Ⅰ主成分では、先の主成分分析 (Table 7-a) で“親密化志向”と名づけた主成分に負荷が高かった“自己隠蔽”と“積極的相互理解”が高い負荷をみせた。対人有能性では、“開始”、“開示”、“情動的支援”、交友状況測度では、2つの量的測度と対親友状態満足感の負荷量が高かった。第Ⅱ主成分をみると、先の主成分分析で“全方向的志向”と命名した主成分に高い負荷をみせた“被愛願望”、“周囲への同調”、“全方向的志向”とともに、“コンフリクト処理”、“否定的主張”が高い負荷を示した。

Table 10-a

対同性-有能性、友だちとのつきあい方、および対同性-交友状況に関する主成分分析 (直接 oblimin 法, $\delta=0$) の結果: 斜交回転後の主成分パターン・マトリックス - 男子-

	I	II
同性親友数-対数変換	.750	.024
ic-I. 開始	.721	.216
同性友人数-対数変換	.662	.311
ic-IV. 情動的支援	.613	.041
fr-IV. 自己隠蔽	-.577	.416
対同性親友状態-満足感	.574	-.170
fr-II. 積極的相互理解	.548	-.028
ic-III. 開示	.543	-.066
対同性友人状態-満足感	.380	-.062
fr-V. 被愛願望	.134	.806
fr-I. 周囲への同調	-.125	.640
fr-III. 全方向的志向	.393	.639
ic-V. コンフリクト処理	-.136	.463
ic-II. 否定的主張	.412	-.443

〔主成分間相関〕

-.099

$N=164$

初期固有値 ≥ 2.187 初期説明率 42.2 %

fr : 友だちともつきあい方下位尺度

ic : 対同性-有能性下位尺度

親友数, 友人数の対数変換 : $\log(1+x)$

Table 10-b

対同性-有能性、友だちとのつきあい方、および対同性-交友状況に関する主成分分析 (直接 oblimin 法, $\delta=0$) の結果: 斜交回転後の主成分パターン・マトリックス - 女子-

	I	II
fr-II. 自己隠蔽	-.742	.133
ic-III. 開示	.732	.076
ic-I. 開始	.681	.274
ic-IV. 情動的支援	.660	.078
同性親友数-対数変換	.603	-.054
対同性友人状態-満足感	.574	-.043
対同親友状態-満足感	.526	-.152
同性友人数-対数変換	.430	.037
fr-III. 全方向的志向	.214	.761
fr-V. 衝突回避	-.056	.653
fr-I. 周囲への同調	-.226	.652
fr-IV. 被愛願望	.114	.628
ic-V. コンフリクト処理	.060	.487
ic-II. 否定的主張	.292	-.453

〔主成分間相関〕

-.060

$N=256$

初期固有値 ≥ 2.376 初期説明率 41.0 %

fr : 友だちともつきあい方下位尺度

ic : 対同性-有能性下位尺度

親友数, 友人数の対数変換 : $\log(1+x)$

次に、女子の結果をみる。第Ⅰ主成分に負荷の高かった変数は、友だちとのつきあい方では“自己隠蔽”，対人有能性では“開始”，“開示”，“情動的支援”，交友状況測度の4個すべてである。第Ⅱ主成分では、先の分析（Table 7-b）で“全方向的志向”主成分に負荷の高かった“周囲への同調”，“全方向的志向”，“被愛願望”の負荷が高く，“表面的志向”主成分を代表する“衝突回避”も高い負荷を示した。また、この主成分には、対人有能性の“否定的主張”と“コンフリクト処理”も高く負荷した。

IV. 考察

交友状況における男女差

被験者の交友状況をみたところ、興味深い男女差がみられた。親友数や友人数という量的特徴においては男女差がなかったが、満足感という質的特徴において男女差が認められた。つまり、親友という点では、同性、異性にかかわらず、女子のほうが満足感を抱いていた。また、恋人関係についても同様であった。ただし、女子のほうが恋人をもつ者の割合が高い。

斎藤・中村（1987）は、男子に比べて女子が対人関係を重視する傾向にあることを見出している。本結果では、量的特徴よりもむしろ質的特徴の点で女子が満足のいく対人関係を営んでいるといえ、興味深い傾向である。つまり、対人志向性の高さが単純に交友の量的拡大とはならないからである。また、この女子の満足感の高さの基底には、高い対人有能性があると思われる。

項目水準での男女差比較によれば、“否定的主張”を除く4領域では女子のほうが有能性が高い傾向が認められた。しかし、Buhrmester *et al.* (1988) は、5領域得点について、被験者の性別×相手の性別×有能性領域の分散分析を行い、被験者の性別に関わる次の結果を得た。①“情動的支援”有能性では、一般に女子のほうが高い、②“開始”有能性では、対異性の場合にのみ男子のほうが高い、③“否定的主張”有能性は、対異性に限り女子のほうが高い、④“開示”有能性は、対同性のときに女子のほうが高い。①や④の傾向は本結果と一致する。和田（1991）は、Buhrmester *et al.* (1988) の対人有能性尺度を参考に尺度を構成し、親密関係維持、関係開始、自己主張の3因子を抽出した（ただし、対象の性別の区別はされていない）。3下位尺度得点の男女差をみると、関係維持でのみ有意な傾向があり、女子のほうがこの点での技能が高いといえる。先行研究をみると、一概に本研究と同じ結果が現れているわけではないので、今

後の検討を要する。

ところで、Deaux (1977) によれば、自己呈示方略として、“地位主張的モード”と“親和的意図モード”がある。性役割の形成とともに、青年期初期の頃には、前者は男子で、後者は女子で顕在的な自己呈示方略となる。つまり、男子は課題達成的になり、女子は対人関係志向的になる。この Deaux (1977) の考えに従うと、女子のほうが一般的に対人技能が育まれるが、男子の場合には、競争に打つ勝つために常に自己主張が求められることになる。つまり、本研究で認められたように、“否定的主張”有能性が高くなる。

対同性-有能性と友だちとのつきあい方の基本的構造

対同性-有能性の基本的構造については、Buhrmester *et al.* (1988) の5次元性が男女ともに支持された。ただし、男子の場合、コンフリクト処理下位尺度を構成する項目が3項目となった。女子短大生を対象として対同性と対異性それぞれの有能性を検討した諸井ら (1999) の結果では、対同性-有能性の開示で2項目、コンフリクト処理で3項目が構成項目になったにすぎない。したがって、本研究の女子と前研究で若干差異がみられたことになる。これは、被験者サンプルの違いに加えて、前研究では対同性-有能性と対異性-有能性を同時測定ではないにせよ連続して測定していることによるかもしれない。

本研究での男女差については、コンフリクト処理の含意する側面が男女で異なることに留意すべきである。もともと Buhrmester らが設定した“コンフリクト処理”項目には①感情の抑制(項目 10, 25, 40)と②融和(項目 5, 15, 20, 35)という2側面が含まれている。男子では①の側面のみが現れた。これは、本来対人関係志向性の強い女子の場合、他者とのいさかいに肯定的に対処することが、単に自分のほうが我慢するとか否定的感情を抑えるだけでなく、相手との強調をはかることと一体になっている。しかし、男子では、いさかいへの対処は、自分の考えなどを変化させることなく、あくまでも感情を抑えることなのである。

有能性下位尺度得点の平均値の相互比較を行うと、男子では「“コンフリクト処理”>“情動的支援”>“開始”≡“否定的主張”>“開示”」、女子では「“コンフリクト処理”>“情動的支援”>“開始”>“開示”>“否定的主張”」の傾向があった。男女ともに、“開始”、“否定的主張”、“開示”が中性点を有意に下回っていた。先行研究(諸井ら, 1999)の対同性-有能性では、「“情動的支援>コンフリクト処理>開始>否定的主張>開示”」の傾向があり、本研究の女子と類似していた。ただし、先行研究での開始の平均点は、中性点とほぼ同等であった。先行研究

や本研究の限りでは、同性に対する有能性の側面のうち、否定的な結果をもたらす危険を孕む技能や、自己の内的面的情報を相手に伝える技能は、相対的に低いと判断できる。いったん関係が形成されると重要となるいさかいの処理や精神的な支え合いに関わる技能が相対的に高いことと対照的である。これらの傾向は、関係崩壊を恐れ、表面的ではあれ関係自体を維持しようとする若者の志向性と一致している。

次に、友だちとのつきあい方の基本的構造について考察する。

主成分分析の結果、男女ともに5主成分が抽出された（男子：“周囲への同調”，“積極的相互理解”，“全方向的志向”，“自己隠蔽”，“被愛願望”；女子：“周囲への同調”，“自己隠蔽”，“全方向的志向”，“被愛願望”，“衝突回避”）。“自己隠蔽”と“全方向的志向”は男女でほぼ共通した項目から構成されている。“周囲への同調”は、男子のほうで構成項目が多く、周囲との対立を怖れる傾向が含まれていると判断できる。“被愛願望”については、主成分名は男女共通にしたが、構成項目がかなり異なる。男子では自己に対する肯定的感情が強調され、女子の場合には自分のことを理解してくれることが重要となる。男子の“積極的相互理解”は友だちとの深い心理的絆の形成を目標とするつきあい方であるが、女子の“衝突回避”では争いを避けて関係維持をはかることが目標とされる。本研究で得られた主成分は、名称は異なるが、基本的に先行研究と対応している（Table 1）。先行研究では男女別の分析が示されていないけれども、本研究では男女の構造差が認められた。これらの構造差は、女子のほうが対人関係を重視する傾向にあるという一般的傾向から理解できる。

下位尺度得点平均値の相互比較によると、男女ともに“周囲への同調”や“自己隠蔽”が低く、男子では“積極的相互理解”が高いという傾向がみられた。これは、平均的にみる限りでは、過剰同調したり、相手を理解しようとする動機づけが低いわけではない。したがって、尺度中性点という観点からみると、臨床的事例や社会評論で浮き彫りにされている青年像が現代青年の全体を代表しているわけでないことになる。

対同性-有能性が友だちとのつきあい方におよぼす影響

本研究では、対同性-有能性が友だちとのつきあい方にどのような影響をおよぼしているかを重回帰分析によって検討した。ここでは、友だちとのつきあい方下位尺度得点を対象とした主成分分析によって得られた2主成分得点を説明変数とした重回帰分析の結果を考察する。

対同性-有能性は、全方向的志向や表面的志向（親密化志向）と有意な関連を

示すが、男女ともに、表面的志向（親密化志向）と強い関連をみせた（説明率は全方向的志向の場合のほぼ2倍）。Buhrmester *et al.* (1988) が仮定した対人有能性は、交友を広げるかどうかよりも、関係親密化と強い関わりがあることになる。これは、次のように考えられるかもしれない。多くの友だちとの関係を形成・維持する全方向的志向は、その人がたまたまおかれている対人環境条件に依存する。その人が豊富な対人技能をもっていたとしても、周囲が対人関係に積極的でない環境であれば、その人は交友拡大への動機づけは抑制される。しかし、いったん形成した関係を親密化するかどうかはかなり個別的条件によって規定される。つまり、その人の対人技能が高ければ関係の親密化が可能になる。

次の対人有能性のどの側面が友だちとのつきあい方に影響しているかを検討しよう。男女で次の共通した傾向がみられた。“開始”有能性は、全方向的志向のみを高め、“情動的支援”有能性は、関係の親密化を促進する。また、“否定的主張”有能性は、交友の広がり抑制するが、親密化を高める（ただし、女子の否定的主張－表面的志向は傾向性）。“開示”有能性は、女子では2つの志向を有意に規定するが、男子では表面的志向のみに影響した。しかし、女子の場合、表面的志向性での偏回帰係数がかなり大きいことから（ $\beta = -.510$ ），“開示”は男女ともに関係の親密化を促進する重要な要因といえよう。次の点で、明確な男女差が認められた。男子では、“コンフリクト処理”有能性が交友の幅を広げる反面、関係の親密化を妨げる。女子では、この有能性は、表面的志向のみに影響する。

①交友の拡大にとって“開始”有能性が重要であり、②“否定的主張”有能性が拡大を妨げとなることは、対人関係の希薄化という従来の指摘にとって興味深い傾向といえる。②は、初期の出会いでの自己主張は意見や考えの非類似性を顕在化させる危険を孕んでいるので、むやみに交友の幅を広げることにつながらない。しかし、①の傾向は、対人関係の表面的志向性の基底に対人技能の低下があるという指摘、つまり「対人技能低下」仮説に反する。つまり、誰とでも仲良くしようとする志向の基底には高い開始技能があることが示されているからである。また、男子でのみ、“コンフリクト処理”有能性が交友拡大を促進する傾向が見出された。先述したように、本来は感情の抑制と融和の2側面から成る“コンフリクト処理”が、男子の場合には感情の抑制項目のみから構成されている。したがって、男子の傾向は、関係初期の段階では自分の感情を抑えることが重要となることを表している。また、女子では“開示”有能性

が全方向的志向を促す傾向があった。関係の進展を考えると、初期段階においては「物理的近接」や「身体的魅力」などの変数が重要となるが、関係の親密化にとっては「自己開示」などの内面的変数が不可欠である（中村, 1996）。したがって、この女子の傾向は、先の“対人関係技能低下”仮説に反するといえる。

次に、親密化志向（表面的志向）の結果をみると、男女ともに、“否定的主張”、“開示”、“情動的支援”の点での有能性が高いと関係の親密化への動機づけが高まることから、これは“対人関係技能低下”仮説を支持する。しかし、男女ともに、仮説に反して、“コンフリクト処理”有能性が関係の表面化をもたらす。感情を抑制したり融和をはかる能力が互いの親密化への動機づけとならない。つまり、この技能は、いさかいを肯定的あるいは発展的に処理するのではなく、現状維持のために役立っている。対人有能性の平均値比較でもこの有能性が最も高かった。これは一般的に技能の高さを表すのではなく、実は対人関係の表面化を促す技能が高いと考えれば、「対人関係技能低下」仮説と一致することになる。

対人有能性や友だちとのつきあい方に加えて同性-交友状況4測度（親友数、友人数、親友状態満足感、友人状態満足感）を含めた主成分分析では、基本的に男女共通した傾向が認められた。同性との実際の交友は、同性との親密な相互作用を志向するかどうかや、“開始”、“開示”、“情動的支援”有能性と関連している。交友変数は、交友の幅に関する志向性、“コンフリクト処理”有能性や、“否定的主張”有能性とは異なる次元上に位置づけられる。これらの結果を踏まえると、被験者が実際に営んでいる交友の様態は、関係親密化志向性や関係親密化技能を反映していることになる。たとえば、交友の拡大を望む志向性が高いからといって、実際に多くの友だちを獲得しているわけではない。“友だち”という概念が一見被験者自身の定義によっていながらも、結局は相手の条件によって規定される双方向的“概念”の部分ももっているのである。そのため、自分がいくら“全方向的志向”にそってふるまったとしても、結局はその場で目標とした人物がどのように自分を受容するかにかかっている。つまり、自己開示や内面的配慮がなければ関係自体が成立しないのである。

「対人関係技能低下」仮説に関する暫定的結論

本研究では、「対人関係技能低下」仮説に一致する傾向と一致しない傾向がともに認められた。したがって、本研究の限りでの確固たる結論を下すことはできない。しかし、暫定的ではあるが、明確になったことは、友だちとのつきあ

いにおける表面的志向や群れ好みを対人技能の一般的低下に帰すことはできないことであろう。もっと、様相は複雑なのである。

ところで、青年心理学や発達心理学では青年期における交友の重要性が重視される（Havighurst, 1953）。本研究もこのような枠組みの中で行われている。そのため、たとえば、若者の表面的志向性はそのようなモデルから逸脱した現象として把握され、その逸脱の基底にあるメカニズムが探索されることになる。しかしながら、これは、規範的思考に陥っているとも考えられる。つまり、「青年はかくあるべきだ」という思考である。

木村（1998）は、明治期において「壮士」に対置された「青年」概念を論じることによって、その時期の若者の心性を解説しようとした。「壮士」とは社会や政治に対する「悲憤慷慨」を主感情として登場した一団である。それを批判・超克する形で「青年」の概念が登場する。「青年」は、自分のすべてを把握してくれる「真友」を絶えず求め、その結果として自己の「内面」をつねに対象化する。これは、まさに青年心理学で想定されている「青年像」である。ここで重要なのは、木村が指摘しているように、雑誌メディアを通してこの「青年像」が流布されたことである。つまり、時代条件の中で「青年」が登場したのである。木村（1998）の論を拡大すれば、たとえば、表面的志向性も時代適応の1つなのである（諸井, 1999）。

〈付 記〉

- (1) 本研究は、平井加苗（社会学科・社会心理学コース平成10年度卒業）が第1著者の下で取り組んだ卒業研究データに基づいている。
- (2) 本研究は、平成9年度静岡大学学内特別研究プロジェクト『人間と地球環境』の1-B「生物学的な限界環境下における人間生活の危機とその克服方法の学際比較研究—砂漠化と都市化が生み出す限界環境を中心に—」〈代表：嶋田義仁 人文学部教授〉の一環として行われた。
- (3) 質問紙の実施にあたって、人文学部酒井英行教授、熊谷滋子助教授、滝沢誠助教授の3先生にご協力を賜った。記して、感謝いたします。
- (4) データの統計的解析にあたって、SPSS/PC + V3.0J（MS-DOS版）およびSPSS 6.1.3J for Windowsを利用した。
- (5) E-Mail: jskmoro@ms.ipc.shizuoka.ac.jp

V. 引用文献

- Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T., & Reis, H. T. 1988 Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 991-1008.
- Deaux, K. 1977 Sex differences. In T. Blass (Ed.), *Personality variables in social behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. Pp. 357-377.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans, Green & Co., Inc. (荘司雅子 (監訳)『人間の発達課題と教育』1995 玉川大学出版部)
- 木村直恵 1998 『〈青年〉の誕生 — 明治日本における政治的実践の転換 —』新曜社
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫 (編)『社会化の心理学ハンドブック：人間形成と社会と文化』川島書店 Pp. 283-296.
- 諸井克英 1999 現代青年のコミュニケーション 諸井克英・中村雅彦・和田 実 (共著)『親しさが伝わるコミュニケーション — 出会い・深まり・別れ —』Pp. 189-220 金子書房.
- 諸井克英・浅野浩一・伊藤啓介・伊藤尚子・渡邊美穂子 1999 女子青年における対人有能性 — 同性関係と異性関係 — 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・人文学科), 50(1), 21-45.
- 中村雅彦 1996 対人関係と魅力 大坊郁夫・奥田秀宇 (編)『親密な対人関係の科学』Pp. 23-57 誠信書房.
- 日本青少年研究所 1997 『ポケベル等通信媒体調査 — 日・米・中国高校生比較 — 報告書』
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, 1, 11-18.
- 岡田 努 1993 a 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田 努 1993 b 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育

心理学研究, **43**, 354-363.

岡田 努 1998 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 教職研究, **9**, 29-39.

長田雅喜 1994 仲間・家族と現代青年 久世敏雄(編)『現代青年の心理と病理』 福村出版 Pp. 111-123.

小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.

斎藤和志・中村雅彦 1987 対人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **34**, 97-109.

総務庁青少年対策本部編 1999 『世界の青年との比較からみた日本の青年 — 第6回世界青年意識調査報告書 —』 大蔵省印刷局

総理府広報室編 1993 青少年と家族 月刊世論調査, 平成5年11月号, 2-69.

上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.

山中一英 1996 大学生の友人関係の親密化過程に及ぼす個人差要因の影響 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **43**, 221-229.

Appendix 1
友だちとのつきあい方尺度項目

- 1 友だちに自分のすべてをさらけ出すのは危険である。
 - 2 どんな人とも友だちになりたい。
 - 3 友だちと意見が対立するのが怖い。
 - 4 本当の姿を見せ合える友だちほど重要なものはない。
 - 5 まわりのみんなから好かれていたい。
 - 6 友だちにはありのままの自分を出せない。
 - 7 どんな友だちとも協調し合いたい。
 - 8 友だちと精神的に深い関係をもちたい。
 - 9 まわりのみんなと何でも同じようにしていたい。
 - 10 友だちにウケるようなことをよくする。
 - 11 友だち以外の人でも仲良くしたい。
 - 12 傷つきたくないで、友だちには本当の姿を見せられない。
 - 13 自分がきらいだと思う人とはつきあわないようにしている。
 - 14 友だちからどう思われるか気になる。
 - 15 まわりのみんなと意見を合わせるようにしたい。
 - 16 仲間と騒いでいるときが最高である。
 - 17 友だちとは何でも本音で話し合うようにしている。
 - 18 友だちを傷つけないように注意を払っている。
 - 19 友だちと自分のお互いの心を打ち明けるようにしたい。
 - 20 まわりのみんなと意見が違って、できるだけ自分の意見を言うようにしている。
 - 21 友だちに自分のことを理解してもらえないと自信がもてなくなる。
 - 22 友だちと楽しい雰囲気になるように気を遣っている。
 - 23 友だちには自分の考えていることを全部言う必要はない。
 - 24 友だちと意見が対立しても、自信をなくさないで話し合える。
 - 25 友だちと分かり合おうとして傷ついても仕方ない。
 - 26 まわりのみんなと同じ意見を示すほうが気楽である。
 - 27 誰かに嫌われていると想像すると不安になる。
 - 28 自信をなくされるくらいなら、友だちと関わらないほうがよい。
 - 29 まわりの人と争いごとを起こさないようにしている。
 - 30 友だちと本当の姿を見せ合うことで、少しぐらい傷ついてもかまわない。
 - 31 友だちとは上辺でつきあうのではなく、本当の姿を見せ合いたい。
 - 32 仲が良いからといって同じ意見をもつ必要はない。
 - 33 誰にでも好印象を与えたい。
 - 34 友だちには自分の本心を見せたくない。
 - 35 友だちと意見や考えがぐいちがっても自信をなくしたりはしない。
 - 36 友だちとは少しぐらい傷ついても本当のことを言い合いたい。
 - 37 まわりのみんなと同じことをしたい。
 - 38 誰からもよい人だと思われたい。
 - 39 友だちとは当たり障りのない会話ですませている。
 - 40 友だちと意見を交わしあっても、それほど感わされない。
 - 41 まわりのみんなから愛されていたい。
 - 42 人間の生き方などについて真剣に話し合うことがある。
 - 43 どんな友だちとも仲良しでいたい。
 - 44 どんな友だちとも楽しくつきあいたい。
 - 45 友だちと本音でぶつかり合っても平気である。
 - 46 友だちには何でも話して欲しい。
 - 47 友だちと同じようにふるまうべきである。
 - 48 やりたくないことでも、友だちと一緒にだと仕方なくやってしまう。
-